

## 亡き父の現前、死を待つ伯父の社交

### — シュティフターの『老独身者』あるいは世代形成の文化的実践 —

杉山 東洋

#### はじめに

シュティフターは彼の小説の中で、人の心の最も深くこの上なく内側にある琴線を震わせるのであり、それを読む者はだれしも思わず声を上げるに違いない。私自身は、かつてこのように思いはしなかったというのか、この私を、あれやこれやのことがこんなふうに素晴らしく魅了し、このように深く傷つけはしなかったというのか？ と。何という達人の手つきで開始早々彼は、孤独で不毛で喜びのない、間違った人生の目的に従い判断を誤った老人と、社交的でうるさく、歓声を上げるような、この世の全てを友情いっぱいに抱きしめる同じく間違った人生の目的に務める若者とを、対比させていることだろう。<sup>1</sup>

1845年、作家アーダルベルト・シュティフター（1805-1868）の小説『老独身者（*Der Hagestolz*）』が雑誌『イリス』にて発表された。その前年に読者への近刊予告として書かれた上記の書評は、おそらく同作に与えられた文芸誌上の最初の評価の声である。その文言は、以下本論で扱われる事柄にとって、有益な示唆を多数含み持っている。雑誌を手にする読者大衆にとって、その物語は集団規模での感動をもたらすと同時に、個々人の体験と重なるものだろうと、書評家は考えた。その際、結婚をしないまま年老いた男と、彼の甥であり、彼のように「決して結婚しな

---

\* 本稿は日本学術振興会および科研費（課題番号 22J10065）の助成を受けた研究成果である。シュティフターのテキストは主としてコールハマー版全集（HKG）を使用するが、同版に未収録の原典を引用する際のみプラハ版全集（PRA）を典拠とし、それぞれ引用や参照の際は略号、巻数、頁数を括弧に入れ付記する。Stifter, Adalbert: *Werke und Briefe. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Im Auftrag der Kommission für neuere deutsche Literatur der bayerischen Akademie der Wissenschaften*. Hrsg. von Alfred Doppler / Wolfgang Frühwald, ab 2002 von Alfred Doppler / Hartmut Laufhütte. Stuttgart u. a. 1978ff. [= HKG]; ders.: *Sämtliche Werke*. Begründet und herausgegeben von August Sauer. Fortgeführt von Franz Hüller / Gustav Wilhelm u. a. Prag 1904ff., Reichenberg 1925ff., Graz 1958ff., Reprint, Hildesheim 1972 [= PRA]. 『老独身者』のテキストに関しては1845年に発表されたものを雑誌版、1850年に小説集『習作集』第5巻に収録されたものを単行本版と、それぞれ近年の慣例にならひ呼称する。また、引用文中における筆者の注釈は亀甲括弧に入れている。

<sup>1</sup> *Österreichisches Morgenblatt*, Nr. 138 (16. November 1844), S. 252. In: Enzinger, Moriz: *Adalbert Stifter im Urteil seiner Zeit*. Wien 1968, S. 46.

いだろう」(HKG 1, 6, 13)と物語冒頭で決め込む若者ヴィクトルとの共通点を含んだ対照関係が、焦点となるのである。

シュティフターの作品の多くがそうであるように、『老独身者』も手を加えられたのち、1850年に小説集『習作集』第5巻に収録された。とはいえその物語の大筋には、大きな違いは生じなかったと言ってよい。学生時代の終わりを目前とし、官公庁への就職が決まっている田舎育ちの青年ヴィクトルは、命じられるがまま独り身の伯父が住まう湖上の島を訪ねる。はじめは何一つ気の合うところがない頑迷な伯父に対し、強い反抗心を抱くヴィクトルであったが、徐々にその態度を和らげていく。伯父の若かりし頃の失恋体験や、甥である自分への教育的目論見が物語後半になるにつれ明らかとなり、ヴィクトルは次第に伯父への愛情と敬意を抱き始める。そして彼は最後、伯父の教えに沿う形で、自身の義理の妹と結婚式を挙げるのであった。老人と若者との極端な対立関係が変容するなかで、若い男性の自己形成が進行し、家族の系譜が最終的に持続する。『老独身者』の物語から一般的に読み取られる主題とあらすじは、さしあたりそのようなものだと言えるだろう。<sup>2</sup>

これまで『老独身者』の先行研究は、シュティフターの他の作品と比べるとあまり多くはないと言われてきた。<sup>3</sup>そしてその比較的少ない解釈を通じて作品の見方が形成されていく過程においては、作者であるシュティフターの私的な側面との関連が、今日に至るまでマッツらの読解によって強調されてきた。<sup>4</sup>シュティフターその人は作家として活動し始める以前の1837年に、ウィーンの前帽子製作者アマリーエ・モアハウプトと結婚しているが、この事実が踏まえられてなお、作家個人と独身という状態との関連が、『老独身者』の読解の傾向のみなら

<sup>2</sup> Vgl. Begemann, Christian: »Der Hagestolz«. In: ders. / Giuriato, Davide (Hrsg.): *Stifter-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. Stuttgart 2017, 47-52, bes. S. 48-51.

<sup>3</sup> Vgl. z. B. Adamy, Bernhard: Beitrag zum Verständnis von Stifters Erzählung „Der Hagestolz“. In: *Vierteljahresschrift des Adalbert Stifter-Instituts des Landes Oberösterreich* 25 (1976), S. 83-100, hier S. 83.

<sup>4</sup> 19世紀末から20世紀初頭にかけて訪れたシュティフター再評価の頃、プラハ版全集にて『老独身者』の導入を担当したナードラーは、「この小説がシュティフターの最も個人的な物語である」と記している。生物学的な意味での子供をもつことがなかった作中の老独身者に、ナードラーは同様のかたちでその生涯を終えたシュティフターの姿を重ねて見る。それにとどまらず彼は、青年期のシュティフターの姿と物語の主人公ヴィクトルとの類似性にも言及した(PRA 3, LXXXIII-LXXXV)。その後ここ半世紀になされた研究としては、ゼーバルトが1985年に、シュティフターに「独身願望(zölibatäre Sehnsucht)」があったというテーゼを、様々な作品を参照しつつ発表している。『老独身者』にこそ言及していないものの、彼の主張は当時としては独創的なものであり、現在のシュティフター像の一面を先取りするものであった。Vgl. Sebald, W. G.: *Bis an den Rand der Natur. Versuch über Stifter*. In: ders.: *Die Beschreibung des Unglücks. Zur österreichischen Literatur von Stifter bis Handke*. Frankfurt am Main 1994, S.15-37, hier S. 35ff. ゼーバルトと同じく作家の生涯全体に影を落とす陰うつな事柄に目を向け、それらを1995年に伝記の形でまとめたマッツは、『老独身者』を「作家の最初の真の巨匠の作」とした。その上で、ヴィクトルがシュティフターにとっての理想像であるならば、逆に独身者の伯父は恐ろしい未来像だろうという独自の仮定を提示している。Vgl. Matz, Wolfgang: *Adalbert Stifter oder Diese fürchterliche Wendung der Dinge*. München / Wien 1995, S. 218, 220.

ず、作家の全体像にまで影響を及ぼしてきたのである。<sup>5</sup>

たしかに『老独身者』には伝記的解釈に適した記述が散見される。このテキストに隠された細かな情報を頼りにシュティフターの陰気な心理を照らし出す研究は、偉人じみた戦後のシュティフター像の硬直化に対する別の視座を提供するものだったと言えよう。<sup>6</sup> しかし近年の論考の中には、そうした研究が些細な問題を取り上げてばかりで、誤りではないにせよ、有意義とは言えないという声も見受けられる。<sup>7</sup> こうした見方は、シュティフター研究史上のマッツらの主張にある画期的意義を過小評価している感もあるため、全面的に支持できるものではない。しかしながら、『老独身者』へのテキスト外在的解釈が必ずしも作者の結婚問題のみを参照点とする必要はないという意味では、その主張は新たな研究の地平を開拓するものであり、考慮すべきだと言えよう。ここで、再度冒頭の書評に目を向けたい。その言葉に従えば、『老独身者』には作者個人の人生経験に留まらず、「それを読む誰しも」の体験と重なる社会的な出来事が描き出されていると推測できるのである。

こうした見立てに沿い、本論では『老独身者』という作品を、とりわけ同時代の社会的背景との関連から解釈する。その際議論の土台となるのは、2000年代以降になされたヴァイゲル、フェダーらによる一連の研究である。両者は18世紀末から19世紀にかけての文学を、「遺産、遺伝 (Erbe)」や「世代 (Generation)」をキーワードとして、様々な学術言説との関連や社会制度の変容を踏まえつつ解釈している。そうした一連の研究ではシュティフターの作品が言及されることも多く、『老独身者』も取り上げられている。その場合はただし、同小説は複数の作品と並べて論じられるため、作中で描かれる人物や風景描写の社会史的背景が十分に議論の対象とされていないように思われる。本論ではまず、彼女らが関わった研究に基づき、作品を論じるための歴史的文脈を整理、確認しよう。そのうえで、両名の議論を補足するかたちで、社会史的知見を作中の描写に関連付け、『老独身者』の分析を進めたい。

以上が本論の第1章及び第2章の内容となる。上記の手順を経ることで、『老独身者』という物語を文化的、社会的な多世代の生の実践として理解し説明するという目的が達成されるだろう。<sup>8</sup> それに続いて第3章では、『老独身者』における「社交 (Gesellschaft; Geselligkeit)」

---

<sup>5</sup> テキスト内在的な分析に取り組む日本の『老独身者』研究においても、伝記的側面との関連付けに議論が帰着する場合がある。そうした例からも、上述した『老独身者』研究の傾向がいかに支配的であったかが証立てられよう。榊鐵夫「シュティフターの『男やもめ』について ― 主として Erzählweise からみた考察」：『大阪音楽大学研究紀要』3号 (1963年)、57-68頁所収、66頁参照。

<sup>6</sup> そうした戦後のシュティフター像を打ち立てた研究の代表例として、以下を参照した。Vgl. Staiger, Emil: *Adalbert Stifter als Dichter der Ehrfurcht*. Zürich 1952.

<sup>7</sup> Vgl. Reinhardt, Hartmut: *Literarische Trauerarbeit. Stifters Novellen Das alte Siegel und Der Hagestolz als Erzähltragödien*. In: Hettche, Walter / John, Johannes / Steinsdorff, Sibylle von (Hrsg.): *Stifter-Studien. Ein Festgeschenk für Wolfgang Frühwald zum 65. Geburtstag*. Tübingen 2000, S. 20-39, hier S. 21f.

<sup>8</sup> 本論では、18世紀後半から歴史学の対象領域として論争され続けてきた「文化 (Kultur)」と「社会 (Gesellschaft)」というふたつの概念について、厳密に区別された定義を設けない。ひとまずは、「過

の役割が世代間交流の文脈に即して明らかにされる。これまであまり注目されてこなかったものの、若者であるヴィクトルとその伯父である匿名の老人との関係性の変化は、社交という観点を採用することで分かりやすく把握できるように思われる。このことを明らかにするために、具体的には作品全体から社交に関係する描写を抽出しながら、シュライアマハーとジンメルという、社交を論じた近代の代表的な思想家の論考を用いてそれらを意味づける。それによって、『老独身者』における世代形成の問題を改めてとらえ直し、先行する議論を発展させながら『老独身者』という作品の新たな読解可能性を導き出せるはずである。以上が本論全体の構成である。なお、話の大筋に大きな違いがみられないことから、本論では単行本版を主たる論及対象とし、雑誌版との異同に関しては場面ごとに解釈上のその意味を確認する。

## 1. 1800年頃以降の「世代」理解とその周辺

現代のドイツ語圏における「世代 (Generation)」という語は、「祖父母、両親、子供、孫と、いうように区別される家系連鎖の個別の構成要素」や、「繁殖の過程にある動物、植物」だけでなく、「おおよそ同じ年齢層の人間の総体」や「ある人間の一生を包括する時空間」といった意味を内包している。<sup>9</sup> 1800年頃に出版されていたアーデルングの『高地ドイツ語辞典』においては、「世代 (Generation)」という語は「血統 (Geschlechtsfolge)」という語の言い換えとして記載されており、「ある世代 (Geschlecht[ ]) の他の世代への継続」や、「下降していく血統 (Linie) の中でのある世代 (Geschlecht[ ]) の個々の成員の、次の世代の個々の成員への継続」と並ぶ、「そうした成員の通常の期間」を意味していた。<sup>10</sup> つまり、今日の「世代」という概念がもつ通時的、共時的意味合いのうち、1800年頃の「世代」という言葉には、多世代のうちの一世代が生きる時間の長さという限定された通時的な意味しか付与されていなかった。むしろ当時は「ゲシュレヒト (Geschlecht)」という単語の多義性のうちに、多様な「世代」の意味合いが回収されていたのである。「ゲネラツィオン (Generation)」という単語が、ひとつの

---

去の具体的な人間の生の現実の再構築を通じて、その行動の理解、説明を可能にする」ことを文化史的研究の目的と定義するフィアハウスの立場をとり、文化史的研究に社会史的研究が包括されるという理解に基づいて議論を展開する。Vgl. Vierhaus, Rudolf: Die Rekonstruktion historischer Lebenswelten. Probleme moderner Kulturgeschichtsschreibung. In: Lehmann, Hartmut (Hrsg.): *Wege zu einer neuen Kulturgeschichte*. Göttingen 1995, S. 5-28, hier S. 13. 「文化」と「社会」を巡る学術的論争の歴史に関しては以下を参照。Daniel, Ute: „Kultur“ und „Gesellschaft“. Überlegungen zum Gegenstandsbereich der Sozialgeschichte. In: *Geschichte und Gesellschaft* 19 (1993), S. 69-99.

<sup>9</sup> ここで挙げた「世代 (Generation)」というドイツ語の今日的な理解については以下を参照した。Art. „Generation“. In: *DUDEN. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. In zehn Bänden*. 3., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Herausgegeben vom Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion. Band 4. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich 1999, S. 1456.

<sup>10</sup> Vgl. Art. „Die Geschlechtsfolge“. In: Adelung, Johann Christoph: *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen*. Zweite vermehrte und verbesserte Ausgabe. Band 2. Hildesheim / Zürich / New York 1990, Sp. 611.

統一された年齢集団という共時的意味合いで理解され始めるのは、しかしまさにこの時期からだとされている。<sup>11</sup> こうした語彙の歴史的变化と連動するかのようになり、1800年ごろのドイツ語圏では世代にかかわる法的、文化的、生物学的な理解の大転換が生じていた。ヴァイゲルやフェダーの研究は、そうした変化を総合的に反映させた「文化的実践」として、文学を捉えようとしている。本論もこの立場に立ち、それらを補足する形で社会史的背景を踏まえた作品分析を行うため、議論の前提となる上記の歴史的転換について、まずは概観しておきたい。

「ゲネラツィオン (Generation)」というドイツ語は、「創造、成立、発生」を意味するラテン語 (generatio) やギリシャ語 (genesis) の影響下で、それらと同様の通時的な意味を備えていたが、それに対して現代では、共時的な世代共同体、あるいはその社会学的呼称としてのコーホートと同じ意味合いで理解されている。<sup>12</sup> そうした意味の歴史的变化がドイツ語圏で生じる時期が 1800 年頃であった。さまざまなほかの文化的現象に関して論じられる場合と同様に、この時代の世代という発想の更新にもフランス革命が関連付けられる。それまでの社会とは異なる革命後の未来を生きていく人々に向けて、ドイツ語圏では例えば、教育の対象としての後続世代という考え方が、カントをはじめとする思想家の論考に登場し始める。また次世代の人間に対する旧世代の人間の影響に関しては、法的分野においても新たな規制を設けることが提案された。コンドルセやトマス・ペインといった法律家が起草した憲法草案には、世代ごとに適用される法律は、各世代によって定められるべきだという発想が見て取れるという。<sup>13</sup> 革命後の社会秩序を組み立てる具体的な過程のなかで、世代という語は共時的な社会集団としての意味合いを獲得していったのである。<sup>14</sup>

時期を同じくする 18 世紀末から 19 世紀にかけては、世代交代を生物学的にとらえ、その発想を社会科学へと転用するという科学史上の流れが生じる。顕微鏡を通して可視化される細胞分裂を、ドイツにおける細菌学の創始者でもある植物学者のフェルディナント・コーンは、「娘細胞」や「母細胞」という表現を用いて、世代間の関係で理解していた。このような細胞単位での組織化の過程から、人間社会の組織化を論じたことで、フランスの思想家オーギュスト・コ

---

<sup>11</sup> Vgl. Weigel, Sigrid: Zur Dialektik von Geschlecht und Generation um 1800. Stifters Narrenburg als Schauplatz von Umbrüchen im genealogischen Denken. In: Weigel, Sigrid / Parnes, Ohad / Vedder, Ulrike und Willer, Stefan (Hrsg.): *Generation. Zur Genealogie des Konzepts – Konzepte von Genealogie*. München 2005, S. 109-124, hier S. 116.

<sup>12</sup> Vgl. Weigel, Sigrid: *Genea-Logik. Generation, Tradition und Evolution zwischen Kultur- und Naturwissenschaften*. München 2006, S. 109.

<sup>13</sup> もっとも、すでに啓蒙主義期において、権威や伝統に根拠づけられない法としての自然法が、世代間の平等を志向していた。相続の自由に対し、当時は自然法的立場から批判があったという。Vgl. Parnes, Ohad / Vedder, Ulrike / Willer, Stefan: *Das Konzept der Generation. Eine Wissenschafts- und Kulturgeschichte*. Frankfurt a. M. 2008, S. 102. このことから、1800 年頃の世代間関係を巡る法的変化が、決して唐突に生じたものではないことには留意されたい。

<sup>14</sup> Vgl. ebd., S. 82-103.

ントは最初の社会学的著作を執筆し、その発想はドイツにも流入していった。<sup>15</sup> また、ある一族の家系を明らかにするための学問であった系譜学 (Genealogie) にとっても、生殖による再生産という側面が重要となっていた。<sup>16</sup> 生物学的な世代の形成という近代に特徴的な「世代」理解は、諸学問に浸透しながら、知の体系を構築するための重要因子と化したのである。

生物学的な世代の形成が認知され始めるのと同時期に、世代間の相続を巡る法律も大きな変化を被った。16世紀から17世紀にかけてのドイツ語圏における財産譲渡の形式は、それ以降と比較して多様なものだった。譲渡される対象物は、動産、不動産で別物として扱われ、それらの移譲の原則は貴族や騎士といった身分ごとに異なり、同一身分内においても男女別の方法が存在していたという。対して18世紀から19世紀にかけては、強力な父権の下で維持される市民的な核家族モデルが主となり、遺産相続が家族内で行われるものとなったのである。<sup>17</sup>

その際また、近代法の典型であるプロイセン一般ラント法やフランス民法典において、遺産は生きている世代中心にとらえられるようになり、死者が法的主体であるという発想が排除された。<sup>18</sup> これは「死者の無価値化」として、とくにフェダーの研究において繰り返し参照される一つの文化的事象である。<sup>19</sup> 西欧中世において、死者は各地の教会や修道院において繰り返し想起される対象であり、そのために文字や歌、踊り、図像といった様々な表現手段が用いられていた。そうした手段を通じた「死者の現前」のための作業は、中世から近世にかけて、社会を秩序付けるための社会的活動のひとつであったとされている。<sup>20</sup> しかし上述した近代的な法制度改革などを経て、死者が現世に影響を及ぼすという発想が弱まり、死者の身体も遺体という単なる物として扱われ始めるというように、この時期以前と比較して死者の価値は減じられていった。ただし、19世紀の文学においては、しばしばこの一般的傾向に反する描写が登場していることもまた確かである。<sup>21</sup> そのため、「死者の無価値化」は、近代西欧における法的、学術的な発展の傾向でありながら、当時としてはまだ市井の人間が十分に受け入れられない発

---

<sup>15</sup> Vgl. ebd., bes. S. 193-204.

<sup>16</sup> Vgl. Weigel (2006), S. 130.

<sup>17</sup> 近代以前の相続権からの歴史的变化に関しては以下を参照した。Gottschalk, Karin: 4. Erbe und Recht. Die Übertragung von Eigentum in der frühen Neuzeit. In: Willer, Stefan / Weigel, Sigrid / Jussen, Bernhard (Hrsg.): *Erbe. Übertragungskonzepte zwischen Natur und Kultur*. Berlin 2013, S. 85-125.

<sup>18</sup> Vgl. Willer, Stefan / Weigel, Sigrid / Jussen, Bernhard: 1. Erbe, Erbschaft, Vererbung. Eine aktuelle Problemlage und ihr historischer Index. In: dies. (Hrsg.): *Erbe. Übertragungskonzepte zwischen Natur und Kultur*. Berlin 2013, S. 7-25.

<sup>19</sup> Vgl. Vedder, Ulrike: 5. Erbe und Literatur. Testamentarisches Schreiben im 19. Jahrhundert. In: Willer, Stefan / Weigel, Sigrid / Jussen, Bernhard (Hrsg.): a. a. O., S. 126-159, hier S. 127.; dies.: Gegenwart und Wiederkehr der Toten: Sterben, Erben, Musealisieren vor und nach der Moderne. In: *Zeitschrift für Germanistik* 17 (2007) 2, S. 389-397.

<sup>20</sup> Vgl. Oexle, Otto Gerhard: Die Gegenwart der Toten. In: Braet, Herman / Verbeke, Werner (Hrsg.): *Death in the middle ages*. Leuven 1982, S. 19-77.

<sup>21</sup> 先行研究においては、この点に関してはゲーテの『親和力』が例に挙げられており、同作における登場人物の死者に対する両義的な態度が指摘されている。Vgl. Parnes, Ohad / Vedder, Ulrike / Willer, Stefan: a. a. O., S. 117ff.

想でもあったと考えられている。

こうした法的、生物学的な世代に関する知見の変化と、それに前後し同時期の大きな議題となった相続権の変容という二つの問題の交差点に位置するのが、死者の遺産を相続するための道具としての遺言書という主題である。先に述べたように、自由と平等を謳うフランス革命の理念から、18世紀末以降の相続法には、死者の意志を制限する考えが盛り込まれた。しかし、遺言という法的手段を用いることで、人は死後もその意志を行使できる。死後の人間の価値が現世において減じられる世相のもと、生死の境界が強められる中で、遺言書は逆説的に、個人の生前と死後の間を、一貫した時間軸で捉えることを可能にするのである。<sup>22</sup>

以上の通り、1800年ごろの「世代」理解にかかわる歴史的变化は、これまで多角的に証立てられてきた。以下では上記の背景を踏まえ、『老独身者』の作品解釈に入る。同様の歴史的背景を踏まえたフェダーの研究においては、『老独身者』をはじめとするシュティフター作品における独身男性は、婚姻によって成立する市民家族の成員ではないながらも、世代を形成する決定的な役回りを担うという二面性によって特徴づけられていた。<sup>23</sup> こうした読解は「世代」という概念の多面性を強調するものの、作品における社会史的背景の分析を回避し、他作品との差異が際立つような解釈の可能性を排している。<sup>24</sup> 「世代」に関係する作中の描写には、フェダーの言及が及んでいない部分も多く、第2章ではそうした場面を取り上げつつ作品全体の流れを追い、近代オーストリアにおけるヨーゼフ主義の知見を用いた分析を行いたい。それによって『老独身者』における世代形成の背景を歴史的文脈に即してより詳しく理解できるだろう。

## 2. 『老独身者』における世代形成の経過

『老独身者』の主人公ヴィクトルの生育には、幼い頃に亡くした父による遺言が深く関与し

---

<sup>22</sup> Vgl. Vedder, Ulrike: *Das Testament als literarisches Dispositiv. Kulturelle Praktiken des Erbes in der Literatur des 19. Jahrhunderts*. München 2011, S. 19-24.

<sup>23</sup> Vgl. Vedder (2011), S. 354.

<sup>24</sup> 2010年代以降の代表的な『老独身者』研究にも、同様の傾向がみられる。ルンテは作中の独身男性である伯父のアウトサイダーとしての性格を分析しているが、その際シュティフターと同時代の詩人の伝記的エピソードを引用しながら作品内の語りやレトリックの歴史性を特定しようとしており、具体的な社会史的知見を参照することはない。Vgl. Runte, Annette: ‚Sonderlich beschieden‘. Genealogie und Generation in Adalbert Stifters *Der Hagestolz*. In: dies. (Hrsg.) *Literarische ‚Junggesellen-Maschinen‘ und die Ästhetik der Neutralisierung*. Würzburg 2011, S. 103-123. ブグゲも伯父の独身者としてのアウトサイダーらしさを指摘している。彼女は他方で、伯父が社会的なつながりのなかにいることにも言及しているものの、それを成り立たせている遺言や「世代」理解に関わる歴史的背景については論の対象としていない。Vgl. Bugge, Andrea: *Einzig und allein. Ledige Figuren in der Belletristik*. Frankfurt am Main 2013, S. 54-60. フェダーらの研究を援用した磯崎の論考は、先行研究と比較して最も多くのシュティフター作品を読み解きながら、作品における「老い」と作家自身の「老い」とを関係づけているが、その結果として『老独身者』単体の分析は、限定的な分量にとどめられている。磯崎康太郎「想像の晩年、晩年の想像 — アーダルベルト・シュティフター作品の老人像と晩年のスタイル」：磯崎康太郎、香田芳樹 編『晩年のスタイル 老いを書く、老いて書く』松籟社 2020年、131~162頁参照。

ている。同じ大学の友人たちと共に帰途についたのち、ヴィクトルは故郷の村に到着する。辺境の地に住まう伯父のもとへと向かうために、彼には荷造りが必要だったわけだが、そこで彼は、齢七十に届く養母ルートミラの口から、彼がこの女性に養育されるにいたった経緯をあらためて聞くこととなる。

私はおまえによく言ってきたね、私がどんなに驚いたかを — それはつまり、喜びで驚いたということなのだけれど — おまえが私のもとで育てられるべしと、おまえのお父さんが遺言書に書き加えたことを知った時にさ。(HKG 1, 6, 25)

ヴィクトルは幼くして生みの母親を亡くしており、実の父親も病で帰らぬ人となった。両親のことを「もはや思い出せない」(ebd., 97) 彼だが、ルートミラという養母を得たことで仕事を始めるまでに成長できた。彼女は、死者となったヴィクトルの父ヒッポリートの遺言に従い、彼の息子を育て、その最期の意志に従ったことになる。遺言の指示にかかわらずヴィクトルを「愛情をもって家族にした」だろうとルートミラは語っているが(ebd., 34)、両者の親子関係が遺言によって生じたこと自体に、ヒッポリートという死者が、単なる遺産相続に留まらず、此岸の人間の生に影響を及ぼしていることが窺えるだろう。この物語では、資産ではない孤児の処遇のために、遺言がその効果を発揮しているのである。

ただし、遺言によって生じるヴィクトルとルートミラの親子関係は、血縁に基づく親子関係とは異なるものとして繰り返し強調される。帰郷したヴィクトルによる「僕のことはもはや何ひとつ喜ばせない」という言葉に対し、ルートミラは訂正を加えようとする。しかしその際彼女は、「もし私がおまえの母親だったら」という仮定を繰り返し口にし、直接にヴィクトルを叱りつけはしない(ebd., 23 u. 25)。彼女は、怒りを露わにすることを許されるほど、ヴィクトルに「多くの愛や善を為したか」が分からないというのである(ebd., 25)。ここでルートミラは、1800年頃に発達した「世代」理解にみられたように、生物学的な血縁を重視しているように思われる。

ヴィクトル自身も、親子をはじめとする親族関係は血縁に依るものだという点を重視していた。帰郷翌日の午後、義理の妹であるハンナと二人でいた際に、今後の人生に対する悲観的な展望を彼は語っている。彼には「父も、母も、姉妹も」おらず、親族である伯父は彼から「わずかな財産物品」をも巻き上げようとしているという(ebd., 46)。ヴィクトルもまた血縁関係の有無によって、伯父のような親類と、ルートミラやハンナのような養子に入った先の家族とを明確に区別していたのである。この認識の根底には、血縁に基づく家族でなければ相続を受け



ることができず、結婚することも不可能だという考えがある。<sup>25</sup> 続く箇所でヴィクトルは、自分は決して結婚することができないとハンナに語っているが、その理由として、「自分には故郷がなく、属する家族もない」ことを挙げる。その結果として、彼は貧しく、女性を養うことができないため、結婚が不可能だという考えに行き着くのである (ebd., 47)。このようなヴィクトルの考えからも、遺産相続が家族単位で捉えられるようになった1800年頃以降の法制史上の転換を読み取ることができるだろう。血縁に基づいた親子関係の有無が、未来世代の生物学的再生産の可能性を左右しているのである。この場面でルートミラが、ヴィクトルの結婚相手に彼の「勢力のある」後見人の娘ロジーナを想定しているのは (ebd., 27)、相続の有無によらずヴィクトルが結婚するためには、結婚相手の家族が裕福でなければならないがゆえなのである。

その後ヴィクトルは未来に希望を抱けぬまま、伯父のいる湖上の城へと向かう。作品冒頭で対照的に描かれるこの若者と老人の関係は、ふたつの世代間の関係ともいえるが、この作品では直接的に「世代 (Generation)」という言葉は用いられていない。父親の兄弟ということから、ヴィクトルにとって伯父が親世代にあたと仮定することはできるだろう。しかしここではそれ以上に両者の世代の違いを示す点として、伯父と彼の住居から伝わるヨーゼフ主義的性格に注目したい。ヨーゼフ主義とは18世紀後半から19世紀中葉にかけてのオーストリアにおける、とりわけ宗教や教会分野での近代化に付随する傾向一般を指す20世紀の歴史学上の用語である。<sup>26</sup> 有用性に基づき諸宗教に対する君主の態度を改めた政策などが特徴的であり、部分的な寛容も認められる多義性にこの概念の特徴があり、時代思潮として様々な社会史的、文化史的の事象に対して適用可能であるとする見方が主流となっている。<sup>27</sup> これまで後期ヨーゼフ主義に区分される時代を代表する作家として、シュティフターはグリルバルツァーと並んで名を挙げられていたが、その際取り上げられるのはマグリスの「ハプスブルク神話」に回収されるようなナショナリズム幻想の志向であった。<sup>28</sup> そうした抽象的な見方とは異なり、『老独身者』の描写からは、以下に記述するように、より具体的なヨーゼフ主義の暗示が読み取られ得る。

伯父の青年期は、雑誌版の中で彼自身によって「アカデミーの時代」と語られ、ヴィクトル達が通っていたと推測される大学とは異なる (HKG I, 3, 69)。彼や、彼の弟であるヴィクトルの父は「貴族だけがそこで育てられた」アカデミーで教育を受けている (ebd., 84)。単行本稿では明言を避けられたこの情報は、発表当時作者と同定されることも多かったヴィクトルの来

<sup>25</sup> 実際、当時のプロイセン一般ラント法の第2部第12章第761条は、「また、養父母と子供との間には一切の法的な相続権が存在しない」と定めている。

<sup>26</sup> Vgl. Art. „Josephinismus“. In: Bruckmüller, Ernst (Hrsg.): *Oesterreich Lexikon in drei Bänden*. Band 2. Wien 2004, S. 145f.; 丹後杏一『ハプスブルク帝国の近代化とヨーゼフ主義』多賀出版 1997年、177頁、186頁参照。

<sup>27</sup> そうした見方を提示した研究書として、以下を参照。Valjavec, Fritz: *Der Josephinismus. Zur geistigen Entwicklung Österreichs im 18. und 19. Jahrhundert*. Brunn / München / Wien 1944.

<sup>28</sup> 丹後、199頁参照。

歴とは異なるものとして理解しなければならないだろう。<sup>29</sup> ここで実証的な先行研究を参照すると、伯父の住まう島はそこに至るまでのヴィクトルの道のりの風景描写を手がかりとし、早くから上オーストリアのザルツカンマーグートにあるトラウン湖に設定されていると推理されていた (PRA 3, LXXVIII-LXXXI)。この見立てを踏まえ、一層の実証的解釈を行ったエンツィンガーによれば、湖上の島にある伯父の住まいを指す通称クラウゼは、ザルツカンマーグートにはよくある修道士の宿泊所の俗称だったらしい。そしてその住居自体の描写には、シュティフターがウィーン大学進学まで長らく生活していたベネディクト派クレムスミュンスター修道院の面影があるというのである。<sup>30</sup>

シュティフターはその僧院のギムナジウムに通っていたが、実際にそこが騎士のアカデミーだった時期もあった。<sup>31</sup> ヴィクトルの伯父や父が通っていたのは、そうしたかつての貴族社会に組み込まれた騎士の養成機関だったと解釈できるだろう。<sup>32</sup> だが年老いた伯父が住まう僧院は既にその機能を停止させ、室内は死んだような静けさに満ちている (HKG 1, 6, 81 u. 84)。ここは伯父たちの通ったアカデミーとは異なる閉鎖された僧院であるが、1780年代のオーストリアでは実学志向のヨーゼフ二世の下で改革が行われ、精神的なものを貴ぶ様々な修道院が有用性を重視するヨーゼフ主義にそぐわないものと見なされ、閉鎖に追いやられていた。<sup>33</sup> 史実ではクレムスミュンスターも、廃院こそ免れたものの、1785年には当地のアカデミーの制度を廃止することとなった。<sup>34</sup> 老独身者はこの僧たちの地所を獲得したと小説のテキスト上に書かれているが (ebd., 119)、実際にヨーゼフ二世の政策下では修道院の所有地が裕福な貴族のために売りに出されていたという。<sup>35</sup> 荒れ果てた修道院にいるアカデミー出身の伯父の姿は、かつて

<sup>29</sup> ヴィクトルをはじめとする学生たちの姿に、作者シュティフター自身の学生時代が投影されていることは、当時の彼の友人たちには自明のことであったと批判校訂版全集の解説において述べられている (HKG 1, 9, 343)。

<sup>30</sup> Vgl. Enzinger, Moriz: Der Schauplatz von A. Stifters „Hagestolz“. In: ders.: *Gesammelte Aufsätze zu Adalbert Stifter*. Wien 1967, S. 54-66, hier S. 61.

<sup>31</sup> Vgl. Enzinger, Moriz: *Adalbert Stifters Studienjahre (1818-1830)*. Innsbruck 1950, S. 136ff.

<sup>32</sup> 1848年に刊行されたクレムスミュンスター修道院に関する概説書には、当時のオーストリアを支配していた女帝マリア・テレジアによる1744年の署名付きの訓令が、国家側からの騎士学校設立に対する最終的な承認となったことが記されている。Vgl. Hagn, Theodorich: *Das Wirken der Benediktiner – Abtei Kremsmünster für Wissenschaft, Kunst und Jugendbildung*. Linz 1848, S. 146. その後修道院では、マリア・テレジアの死に際し複数の頌詩が書かれ、彼女が没した一月後には死者のためのミサが開催されている。Vgl. Hagn, S. 94, 167. 騎士学校の存立基盤には、マリア・テレジアの存在があったといえるだろう。

<sup>33</sup> ロビン・オーキー『ハプスブルク君主国 1765-1918 マリア=テレジアから第一次世界大戦まで』(三方洋子 訳) NTT 出版 2010年、54頁参照。

<sup>34</sup> Vgl. Hartkopf, Winfried: Literarische Garten. Anmerkungen zum Gartenmotiv in Stifters Erzählung „Der Hagestolz“. In: Sepl-Kaufmann, Gertrude u. a. (Hrsg.): *Stets wird die Wahrheit handern mit dem Schönen*. Köln / Wien 1990, S. 289-320, hier S. 319.

<sup>35</sup> Vgl. Stekl, Hannes: Zwischen Machtverlust und Selbstbehauptung. Österreichs Hocharistokratie vom 18. Bis ins 20. Jahrhundert. In: ders.: *Adel und Bürgertum in der Habsburgermonarchie 18. bis 20. Jahrhundert: Hannes Stekl zum 60. Geburtstag gewidmet von Ernst Bruckmüller, Franz Eder und Andrea Schnöller*. München / Oldenburg 2004, S. 14-34, hier S. 20.

のエリート男性としてのヨーゼフ主義者の成れの果てであると理解できるのである。

以上が、ヴィクトルと伯父との世代の隔たりを示す社会史的背景である。自分の指示に従い孤島まで歩いてきたヴィクトルに対し、伯父は彼なりの教育と相続の手続きを行うこととなる。甥への教育の一環として、伯父は銃器を用いた狩猟ができるかどうか訊る (ebd., 111)。クレムスマンスタターの騎士学校には、余暇に狩猟を行う習慣もあったという報告が為されており、伯父の青年時代の体験から、甥の能力を高めようとしていると考えられるだろう。<sup>36</sup> また、ヴィクトルの父親亡きあと、伯父はその財産が奪い取られるのを防ぐために、自身の所有物としていた。そして、成長したヴィクトルを自宅に招いた伯父は、自身の遺産相続人となるだろう甥に、相続に関する書類を渡すと宣言するのである。ここでは、血縁関係にある家族内で、世代を超えた財産の維持が行われている。このとき子供は、そのように築き上げられた財産を引き継ぐことで、結婚に伴い子孫を残す役割を担わされるのである。<sup>37</sup>

とはいえ、ヴィクトルにとって真に結婚の動因となったのは、必ずしもこうした経済的な理由だけではない。彼が結婚のイメージを獲得したのは、視覚的な肖像によるところが大きいのである。島での滞在中にヴィクトルは、伯父の家にあった在りし日の若き父の肖像画を目にする。伯父によれば、騎士学校には「全ての子弟を記念のために」絵に残すという習慣があった (ebd., 97)。彼はその肖像画を見たうえで、ヴィクトルと彼の父ヒッポリートの見た目が似ていることを指摘する (ebd., 96 u. 98)。自分に生をもたらした父の姿を画像メディアの仲介で初めて認識したヴィクトルの胸中には、「豊かな憂いのある、悲しくも甘美な慰めを与える心情」がたちのぼっていた (ebd., 97)。

その絵は、鑑賞者が今の時点で、若くこの世界に対して限りなく汲めども決して尽きぬ希望で満ちているように、描かれた男性がまだ幸福で若く希望に満ちていたとくに過ぎ去った時間へと引き戻した (ebd.)。

肖像を通して父を見るとき、ヴィクトルの心中では、病床で倒れた死者としての父とは異なる幸福な生前の父の姿が浮かび上がっている。このような肖像の機能は、中世以降の西洋キリスト教圏における「想起のための肖像 (Memorialbild)」と同様のものである。権威ある王や、修道院の創立者や寄進者の絵画など、偉大な業績を残した過去の人間を集団規模で想起するため

---

<sup>36</sup> Vgl. Hagn, S. 150. 伯父の狩猟への言及は、水泳の出来栄えに関する伯父の発言と合わせて「ギリシャ的な」肉体美への熱狂としてこれまで捉えられていた。Vgl. Loock, Wilhelm: *Adalbert Stifter. Der Hagestolz*. München 1962, S. 34.

<sup>37</sup> 『老独身者』における伯父に自己保存の欲求を読み込むコールシュミットの研究をここでは参照した。Vgl. Kohlschmidt, Werner: *Leben und Tod in StifTERS Studien*. In: ders.: *Form und Wirklichkeit. Beiträge zur Geschichte und Wirkung der deutschen Klassik und Romantik*. München 1955, S. 210-232, hier S. 219.

に、絵画は重要な手段であった。<sup>38</sup> 伯父と父の世代特有の文化として、「前世紀の家族像」のような画風の肖像が、ヴィクトルに亡き父の現前を可能にさせたのである (ebd., 96)。

その後、伯父が肖像画家に依頼して描かせたという若き日のルートミラの肖像画をも、彼は目にする事となる。その姿は、義妹ハンナと瓜二つであった。この絵を目にしたとき、ヴィクトルは父の絵の場合とは異なる反応を示す。

なんとこの男〔ヴィクトル〕は紅潮し、そして声を上げた。「この女性はハンナです、僕の妹です。」 / 「違う」と伯父は言った。「これはルートミラだ、彼女の母親だ。一体どうしてハンナを思いつくだ？ あの娘はまだ、この絵が描かれた頃は全然生まれていなかった。お前に養母は何もわしのことを語らなかったのか？」 (ebd., 125)

ここで若き日のルートミラの肖像を見てヴィクトルが示した恥じらいの反応は、ハンナに対する愛情の自覚と捉えられるだろう。このような肖像を通じた女性への恋慕は、このあと語られる伯父のルートミラに対する感情の成立過程と同一のものである。画家にルートミラの肖像を描かせた若き日の伯父は、「彼女にその後つよく好意を抱いた」という (ebd., 126)。そのような過去を持つ伯父との語らいの中でヴィクトルは、青年期の幸福そうな父と、ルートミラとの秘められた恋愛関係を、絵画と同時に伯父の口から聞き知る。若き日の父は、もともとルートミラと相思相愛の仲であったのだ。その話を聞いてヴィクトルは、伯父のように視覚的情報に基づき、ルートミラが想定していた力のある後見人の娘ロジーナではなく、義妹ハンナを結婚相手に選ぶこととなったのである。<sup>39</sup> ここでは、金銭的に価値づけられる遺産の相続を考慮しない視覚的愛好に基づく結婚観が世代を超えて引き継がれているとともに、死者の過去によって、生者の未来が決定づけられているのである。

こうして、物語冒頭で結婚ができないことを嘆いていたヴィクトルは、物語終盤でハンナとの結婚を果たした。その婚礼の場への出席をヴィクトルは伯父にも頼んだが、彼が来ることはなかった。その理由は、「何もかもが遅すぎた」からだ、と、伯父の言葉を継ぐかたちで語り手に

---

<sup>38</sup> Vgl. Oexle, Otto Gerhard: *Memoria und Memorialbild*. In: Schmid, Karl / Wollasch, Joachim (Hrsg.): *MEMORIA. Der geschichtliche Zeugniswert des liturgischen Gedenkens im Mittelalter*. München 1984, S. 384-440. 同論考は、「死者の現前」という問題の一面として「想起のための像」を捉えており、社会的な行為であるという点で「家族の肖像 (Familienbild)」や「寄進者の肖像 (Sitterbild)」のようなほかの絵画を指す概念と区別して「想起のための像」を定義している。

<sup>39</sup> このような独特の形式に依拠する愛情の発生する過程については、ズステックが繰り返し指摘している。Vgl. Susteck, Sebastian: *Das Rätsel Partnerwahl. Ein Gespräch in Adalbert Stifters früher Erzählung Der Hagestolz und die späten Texte Der Kuss von Sentze und Der fromme Spruch*. In: *Jahrbuch des Adalbert Stifter-Instituts des Landes Oberösterreich* 13 (2006), S. 37-48, hier S. 37-40.; ders.: *Liebesgründe. Zum Beginn von Liebe in Erzähltexten des deutschsprachigen Realismus*. In: *Jahrbuch der Raabe-Gesellschaft* 47 (2006), S. 126-146, hier S. 131f.

より述べられる。伯父が失した機会が何に関するものだったかは、つづく無花果の木の比喩に暗示されていると考えられるだろう。

「親切な、やさしげで偉大な庭師はその木を火にくべず、毎年春に実のなっていない葉を見つめる。そうして葉は春の度に碧くなる。それらが次第に少なくなり、最後にはただ枯れた大枝が突き出るだけになるまで。そうなればその木は庭から取り除かれ、その場所は引き続き有効活用される。その他の木々はしかし花を咲かせ生長し続ける。そして、それがあの木の種子から芽吹き、あの木のように甘い実を運んでくるとは誰も言わないだろう。」そうして日は何度となく繰り返し照り、青い空は一つの千年から次の千年まで微笑みかけ、大地は古くからの新緑に身を包み、それぞれの世代 (die Geschlechter) は最も若い子供にまで、長い連鎖 (Kette) をつたって降りていく。しかし彼は全てのそうした類のものから抹消されている。というのも、彼の存在はどんな像 (Bild) を成すこともなかったし、彼の子孫たちが共に時間の流れの中で下っていくことはないからだ (Ebd., 142)。

ここでは、生物学的な世代の連鎖の可能性が伯父にはもはやないことが、系譜を表すための伝統的な形象である木の描写によって示されている。<sup>40</sup> またここでは子孫の有無と並んで、「像」を残さなかったことも、そうした世代間の連続性を伯父が保てなかった要因と見なされている。この小説においては、図像化された人間の姿が、次世代の形成に重要な役割を果たしている点で、近代以前の西洋文化の影響をも読み取ることができるのである。<sup>41</sup>

遺産を相続させるための子孫の確保は、結婚の目的であると同時に自身の死後の生を継続させるための手段でもあるかのように伯父は語っていた。

一人の高齢男性が様々な行いの丘の上に立つとき、それが彼にどう役立つというのか？

[中略] 私の死によって、私が私として存在していたもの全ては無に帰す — だからこそお前は結婚しなければならないのだ、ヴィクトルよ、それも非常に若く結婚しなければなら

<sup>40</sup> 以下の研究は、中世から近代に至る西洋の歴史において用いられてきた木のイメージが、様々な形で系統や体系と結びついてきたことを記述している。Vgl. Macho, Thomas: *Stammbäume, Freiheitsbäume und Geniereligion. Anmerkungen zur Geschichte genealogischer Systeme*. In: Weigel, Sigrid (Hrsg.): *Genealogie und Genetik. Schnittstellen zwischen Biologie und Kulturgeschichte*. Berlin 2002, S. 15-43. デイドロヤグランペールの『百科全書』においても、系譜学に関するほぼすべての項目に、本や図表と並んで、木も系譜を表現する形象として書かれているという指摘がある。Vgl. Weigel (2006), S. 25.

<sup>41</sup> 伯父の名が作中で明かされないこともまた、「想起 (Memoria)」という宗教的、社会的行為の文脈から意味づけられる。死者の名前は、それを生者が呼ぶことによって、その人物を思い返し、「現前」させるための重要な手立てであったとされる。Vgl. Oexle (1982), S. 31.; ders. (1984), S. 385. 名を呼ばれない伯父は、いまだ此岸に立つ生者でありながら、死後の忘却に脅かされているのである。

らない (ebd., 122f.)。

結婚という営みが、自身の死後も自分を存在させる手段であるという「妄想」を伯父は抱えている。<sup>42</sup> ゆえに彼は、結婚相手への愛情の有無は問題とならないと語っている (ebd., 125)。しかしながら伯父は、ヴィクトルの父ヒッポリートやハンナの母ルートミラと異なり、青年時代の恋の相手とは異なる人物を結婚相手に選ぶことなく、老独身者となっている。ヒッポリートとルートミラは元々相思相愛だったが、ヒッポリートが、父親の友人の仕事上の不始末を処理する一環で、その男性の娘と結婚せざるを得なくなったため、両者の仲は引き裂かれたのである。このことを踏まえれば、ヒッポリアートの遺言に基づくヴィクトルの養育を決めたルートミラは、かつて別れた恋人の息子を育てるという形で、あり得たかもしれない家族関係を構築したとも考えられる。ここでは血縁ではなく、愛情に基づく親世代と子世代の関係付けが為されており、1800年頃以降の「世代」理解にそぐわない親子の在り方が描かれている。その意味では、亡きヒッポリアートの遺産を管理し、ヴィクトルへ受け渡した伯父もまた、かつて愛したルートミラの義理の息子との世代間関係を築いたということから、愛情を軽視しているとは言い切れまい。彼は金銭的な備えも含め、家族の安定を維持することの意義を自身の甥に説き、それと合わせて、青年が自立するために必要な教育を自身の世代の価値観に基づき行った。伯父やルートミラの行動を総合的に捉えると、二人は親子の系譜が生物学的なものか否かという点に対して、絶対視しつつそれとは異なる関係を築こうとしており、当時の世代理解に基づく家族像に対し両義的な態度を示しているのである。<sup>43</sup>

以上の通り、『老独身者』における世代は、遺言、遺産相続、世代の連鎖といった様々な主題を複雑に絡み合わせながら形づくられていく。その描写には、当時の社会における「世代」理解のみならず、文化史的、社会史的な情報も読み取られた。なお、「世代」の連鎖という主題は、シュティフターのほかの小説にも見出すことができる要素でもある。そうした他の作品と比較すると、『老独身者』の場合、子孫がないことで、伯父には連続性が存在しないという点が取り上げられてきた。<sup>44</sup> しかし、それは作品全体に一貫しているわけではない。そのことを明らかにするために第3章ではまず、作品における「帯」と「鎖」という言葉に着目した作品分析

<sup>42</sup> ヴァイゲルは、生殖によって自己を延命させられるというこのような「妄想」を主として提示してきたのが、文学であったと述べている。Vgl. Weigel (2006), S. 71ff.

<sup>43</sup> 伯父が老独身者であることの苦しみが、此岸における実存の問題に留まっているというハンターの指摘は、ここでルートミラも含めた親世代の登場人物たちの非生物学的な親子関係の構築の理由を考えるうえで示唆的であるだろう。Vgl. Hunter, Rosemarie: Kinderlosigkeit und Eschatologie bei Stifter. In: *Neophilologus*. 57 (1973), S. 274-283, bes. S. 278.

<sup>44</sup> Vgl. Ingen, Ferdinand van: Band und Kette. Zu einer Denkfigur bei Stifter. In: Laufhütte, Hartmut / Möseneder, Karl (Hrsg.): *Adalbert Stifter. Dichter und Maler, Denkmalpfleger und Schulmann. Neue Zugänge zu seinem Werk*. Tübingen, 1996, S. 58-74, hier S. 69.

をおこなう。それを踏まえ、『老独身者』における世代という発想に限定されない人間関係のあり方としての「社交」の描写について、同概念を論じた思想家の言葉を援用しながら跡付けていこう。

### 3. 世代間の縛りなき社交

#### 3. 1. 市民社会の紐帯なき社交

子孫を残すことのない伯父の生涯を表す先述の無花果の比喻に関する場面においては、世代間の「連鎖 (Kette)」という言葉が用いられていた。シュティフターの小説作品にはこの鎖というモチーフがたびたび登場し、運命や因果律といった秩序を表現するために用いられる。<sup>45</sup> このようなモチーフに着目した先行研究においては、「鎖」という言葉は「帯 (Band)」と同義のものとして理解されている。<sup>46</sup> けれども、『老独身者』においては、世代間の通時的意味合いで「鎖」という言葉が使用されるのに対し、「帯」には共時的な関係性を表すという用法の違いが存在しているように思われる。

伯父とその召使たちによって管理された孤島で、ヴィクトルは彼らと生活をともにすることとなる。その生活の大半が描かれる「滞在」と題された章において、ヴィクトルは一度島を出たいと伯父に願い出る。しかし彼の申し出は伯父によって拒否され、孤島の地理的状況から自身が「捕虜」同然で逃げられないことをヴィクトルは知らされる (ebd., 101)。他者の意志を尊重しない老人のかたくなさに直面したヴィクトルは、やむなく島に留まることを決めた。このとき彼は、「今から私たちの間のあらゆる繋がり (Bande) は切り離され、私たちはもはや親族の関係ではありえない」と述べる (ebd.)。伯父はヴィクトルの宣言を認め、老人と若者の対立が、同じ時を生きる親戚同士の関係を破綻させるに至る。

しかし物語後半においてヴィクトルは、伯父の態度の隠された教育的意図を知る。そして島を出てルートミラのもとへ帰還した際には、「伯父さんは立派で素晴らしい方ですね」と語るまでに、伯父への尊敬の念を抱いている (ebd., 137)。その変化を反映するかのごとく、島を出る直前のヴィクトルと伯父との食事の場面では、一端は解消された両者の親戚という間柄が、回復されたかのように解釈できる記述が存在する。ヴィクトルとの夕食の場で、伯父は、ヴィクトルを島から出す準備が整ったことを告げる。その後、次の会話が二人の間に生じる。

「おまえはだから」と伯父は言葉を結んだ。「明日の朝食後には出発できる。もしおまえ

---

<sup>45</sup> 小説『アブディアス (Abdias)』冒頭で語られる「原因と作用の連鎖 (Kette)」は、その典型例である (HKG 1, 5, 238)。

<sup>46</sup> 注 44 参照。同論では『高い森 (Der Hochwald)』、『愚者の城 (Die Narrenburg)』といった作品と並んで『老独身者』を取り上げている。

がその決心をしたならな。お前は完全にお前の主人であり、お前の気に入るように行動できるのだから。」 / 「私は明日旅立つとしっかり決心しましたが」とヴィクトルは応えた。「その件はあなたの手任せ、伯父さん。そしてあなたがいいとみなすことをするつもりです。」 / 「それなら」と伯父は言った。「既に午前に行った通りだが、私はおまえが明日出ていくのがいいと思う。未来がもたらすものが未来を運んでくるのだし、おまえが私の助言に従うことを望むから、お前はそれに従う。お前はあらゆる点で縛り (Bande) なしだ。」 (Ebd., 130)

この箇所では伯父は、ヴィクトルへの縛り (Bande) はないと述べており、両者は未だ絶縁状態であるかのようである。しかしつづく箇所では語り手は、上の会話が「二人の親族が彼らの関係について夕食の間に語った唯一の言葉だった」(ebd.) と述べている。この記述から、かつてヴィクトルによって断ち切られた「親族の関係」は、なお存続しているということが分かるだろう。ヴィクトルと伯父の関係性が変化するなかで、「帯 (Bande)」という単語は、親戚間の「繋がり」を意味するものから、個人を束縛するものへと意味を変えつつ、それなしでも成立する「親族の関係」を指摘するための概念として転用されているのである。

作品冒頭では、この「帯」は結婚によって生じるものというさらに別の意味合いで言及されている。物語が始まるや否や、美しい緑の上に行く若者たちの姿が描かれる。ヴィクトルを含む彼ら学生は、「結婚をしない」という宣言を次々で行う。その中で、「帯 (Band)」という言葉が口にされている。

「はっ、誰が一体結婚するっていうんだ」と、ある者は言った。「女という愚かしい帯 (die lächerlichen Bande) を巻いて、鳥かごの止まり木の上の鳥のように座っているなんてさ？」 (HKG 1, 6, 13)

以上の発言から、若い男性たちに共通した価値観として、結婚の拒否が読者に印象付けられる。すでに物語冒頭から、親族関係に関わる「帯 (Bande)」という単語が、個人にとって否定的な意味合いで用いられていることは明らかであろう。とはいえ、ここで学生たちが語る、自身の行動を制限するものとしての「帯」は、具体的にはどのようなものなのだろうか。

『老独身者』という作品においては、両性の結婚と出産により形づくられる市民的な家族像が明確に描かれている箇所をあまり見出すことができない。ヴィクトルは生みの親とは早くに死別し、ルートミラのもとで養子として育つ。ルートミラは、「おばあさんかという年で」ハンナを出産したものの、彼女の父、すなわちルートミラの夫は、その直前に亡くなったと語られている (ebd., 35)。唯一、典型的な市民的家族として描かれているのは、故郷で旅支度をするヴ



ィクトルのもとを訪ねる後見人フェーダーマンとその妻、そして二人の子であるフェルディナントとロジーナたちであろう。ゆえに結婚によって生じる「縛り」を理解するために、ここでは後見人の発言を参照したい。彼は就職後のヴィクトルの生活を予見し、「それでは、厳しい仕事というくびき (das Joch) をかけられるまで、大いに君のあと少ししかない自由の日々を楽しみたまえ」と述べている (ebd., 38)。ここで用いられる「くびき」という表現をここまで見てきた「帯」と同様のものと捉えるならば、家のなかでの生活と家の外での仕事とによって成り立つ近代市民社会への参入が、結婚によって生じる「縛り」であると理解できるだろう。<sup>47</sup> 伯父とヴィクトルとの血縁に基づく親戚関係は、そうした市民社会の基盤となる発想に付随するものだと思える。それでは、そのような「縛り」のない状態で可能な伯父とヴィクトルとの関係とはいかなるものだったのだろうか。

この疑問に対する一つの答えを与えてくれるのが、近代ドイツの思想家フリードリヒ・ダニエル・エルンスト・シュライアマハー (1768-1834) が記した『社交的振る舞いの理論についての試論』(1799) である。これは、すでにカントやクニッゲといった啓蒙主義時代の思想家の著作に登場していた「社交性 (Geselligkeit)」という概念を理論的に捉えたドイツ語圏で最初の論考である。<sup>48</sup> シュライアマハーは、「自由で一切の外的な目的によって縛られず、定められない社交性は、あらゆる教養のある人々から彼らの第一にして最も高貴な諸要求のうちの一つとして求められている」という一文で論をはじめている。<sup>49</sup> そして社交性が実現される場では、「家庭の、及び市民の諸関係」が一定の間排除されなくてはならないという。<sup>50</sup> ここでは家庭と社会とに区分けされた市民社会の価値観が表れており、そうしたものの外で社交性は生じると述べられている。このことから、『老独身者』における「縛り」を離れた人間関係は、シュライアマハーが論じたところの社交性と歴史的背景を同じくし、近似した意味をもっていると解釈できるだろう。

### 3. 2. 犬のモチーフによる社交の表出

『老独身者』における社交性は物語の中盤、伯父の暮らす辺境の小島をヴィクトルが訪問した際に、彼の学生らしさとの関連で強調される。孤独に伯父のもとへと歩みを運ぶヴィクトル

---

<sup>47</sup> 近代西欧において男女の類型化と並行して進められた、男性は家庭外の公的な領域、女性は家庭内の私的な領域に属するという性の性格付けに関しては以下を参照した。Hausen, Karin: Die Polarisierung der „Geschlechtscharaktere“ – Eine Spiegelung der Dissoziation von Erwerbs- und Familienleben. In: Conze, Werner (Hrsg.): *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas*. Stuttgart 1976, S. 363-393.

<sup>48</sup> ギュンター・メッケンシュトック「シュライアマハーの社交理論」『基督教研究』(水谷誠 訳) 67号、2巻(2006年)、13-30頁所収、17頁参照。

<sup>49</sup> Vgl. Schliermacher, Friedrich Daniel Ernst: Versuch einer Theorie des geselligen Betragens. In: *Kritische Ausgabe*. Abt. 1. Bd. 2: Schriften aus der Berliner Zeit. 1796-1799. Hrsg. von Günter Meckenstock. Berlin 1984, S. 163-184, hier S. 165.

<sup>50</sup> Ebd.

であったが、途中で故郷から彼を追ってきた実家の老犬スピッツという連れを得る。その老犬に対し伯父は、「憐れな幽霊」という否定的な表現を持ち出したうえで、学生がいつもそのような犬という生物を飼おうとすることに不満を見せたのである (ebd., 79)。実際にはスピッツは養母ルートミラの家の飼い犬であり、厳密に言えば学生ヴィクトルに飼育されたわけではない。スピッツが故郷を去ったヴィクトルにとって一匹の旅の仲間となっている状況を巡って、まずこの箇所では伯父の言葉を通じて、犬というモチーフが学生の典型であるように意味づけられているのである。<sup>51</sup>

犬というモチーフは、「社交」の問題との関連で再度物語のなかで重要な役割を果たす。ヴィクトルと伯父との衝突が描かれる単行本版第四章及び第五章においては、男子学生の描写にみられた社交性が、犬に対する伯父とヴィクトルとの間で対応が一致しないことの要因としても示される。その際、「社交 (Gesellschaft)」に関する語彙が効果的に用いられ、両者の性格の異なりが浮かび上がるのである。

第四章の後半で、ヴィクトルは伯父のいる湖上の島にたどり着く。その住処の入り口で、鉄格子の門を隔てて甥と伯父は相まみえるが、伯父は目の前の若者が甥と分かるや否や、彼の後見人や亡き父を罵りだす。続けて、この二人を分かち最初の衝突が、会話を通じて発生する。老人は「犬を湖の底に沈めて殺すのだ」とヴィクトルに命令するのである (ebd., 70)。間髪入れずそれに抗ったヴィクトルは、夜まで島の屋外に留まり、老犬スピッツと共に野宿に臨むこととなった。その日の晩にヴィクトルを迎え入れた伯父の従者クリストフが語った、「主人は犬の些事を忘れたし、手など上げたりはしない」 (ebd., 76) という言葉から察すると、この伯父の仕打ちは一時の妄言であったのではないかと見る向きもある。<sup>52</sup> しかし、このような犬を巡る伯父と甥の最初の描写には、作中で一貫して描かれていた伯父の非社会的な態度の一端が伺える。またこの場面には、ヴィクトルと伯父の差異を考慮するための起点としての重要性があるといえよう。この第四章における犬を巡る描写の意味を分析するための決定的な判断材料として、さらに第五章「滞在」におけるある場面を取上げ、そこで用いられる「社交」という言葉に注目してみたい。

---

<sup>51</sup> この犬のモチーフは、シュティフターと同じ時代を生きたオーストリアの詩人レーナウによる同名の詩『老独身者 (Der Hagestolz)』 (1838) でも用いられている。そのテキスト上では、第一連一行目で「女がいない、子供もいない」と述べられ、第二連一行目で「そしてまた私に近づく忠犬もいない」と語られ、語り手の孤独を強調するための詩行が、連を分けて構成されている。ここでは、家族とは別の存在ながらも、老独身者の孤独を印象付けるために犬というモチーフが扱われていると解釈できよう。Vgl. Lenau, Nikolaus: *Der Hagestolz*. In: ders.: *Werke und Briefe*. Bd. 2. Wien 1995, S. 135-136, hier S. 135. この詩には、シュティフターの小説と共通する描写が複数含まれていることが既に指摘されているが (HKG 1,9, 345f.)、レーナウの詩の場合、犬は不在のものとして言及されるのみである。それに対してシュティフターの小説においては、犬が物語の展開に深く関わっている点が特徴的である。

<sup>52</sup> Cf. Gordon, Kevin A.: *Historical Rupture and the Devastation of Memory in Adalbert Stifter's Der Hagestolz*. In: *Journal of Austrian Studies*, vol. 45 (2013), pp. 87-112, here p. 98.

親戚二人の間の最初のきちんとした会話は、なんとも奇妙なきっかけを通じて、すなわち嫉妬から導かれた、と言えるだろう。つまり、ある晩ヴィクトルが、ちょうど何度か行っていたように、島を通過して歩き回ってから、四匹の犬全て — 伯父の犬も連れて帰ってきた時のことだ。犬たちはもうずいぶんと長い間ヴィクトルの仲間になっていて、伯父の犬とスピッツの社交 (Gesellschaft) は以前よりも楽し気に、活発になっていたのだから、たまたままだ庭にいた伯父は、彼らを見ながら言った。「おまえのスピッツは、信じられない私の三匹の獣たちよりも、またずいぶんと優れているな。分からないのだが、なぜ犬どもはそんなにお前になついているのだ？」 (Ebd., 110)

全知の語り手によって強調される伯父の嫉妬は、彼の三匹の飼い犬と、ヴィクトルの連れてきた老犬スピッツが形作る「社交 (Gesellschaft)」に向けられている。ここに現れる「社交」という言葉は、雑誌版には存在しなかった、シュティフターの修正の跡である (HKG 1, 3, 91)。別の個所には、ヴィクトルがスピッツと共に寝室に入るのに対し、叔父は犬に寝首をかかれることを恐れ、別室で眠りにつくという記述が存在する (ebd., 81 ff.; HKG 1, 6, 109)。このことから、叔父にとって不可解な犬たちとの触れ合いが、ヴィクトルにとっては問題なく実現する現象であったと解釈できるのではないだろうか。

こうした社交性と食事時間との関連が物語の展開に大きく関わっている点で、シュティフターを 1900 年頃に活躍した社会学者ゲオルク・ジンメル (1858-1918) の先駆者として捉えることもできるだろう。ジンメルは、シュライアマハーからほぼ一世紀後に、社会学的、社会心理学的な側面から社交性の概念を論じ、その一環として会食を哲学的に考察している。<sup>53</sup> 彼は、あらゆる個人は思い思いの集団に属するという意味で社会的存在であると「会食の社会学」という論考において述べている。そして、会食とは、最も個人的な食べる、飲むという行為が、この上なく集団によって共有される行為となっており、それが会食の「社会的なイメージ」であると言うのである。<sup>54</sup> 『老独身者』の場合、伯父がヴィクトルを待たず食事をすることや、犬に食われることを恐れるという発言から、伯父には自分以外の存在と共同の行為として会食が想定されていないと言えるだろう。この時点での伯父は、ジンメルが会食に見出すところの社交性を備えていないのである。<sup>55</sup>

<sup>53</sup> 社交性という概念の歴史におけるジンメルの位置づけについては以下を参照。Hinrichs, W.: Art. Geselligkeit. In: Ritter, Joachim (Hrsg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. Band 3., Basel / Stuttgart 1974, Sp. 456-458, hier Sp. 458.

<sup>54</sup> Vgl. Simmel, Georg: *Soziologie der Mahlzeit*. In: ders.: *Individualismus der modernen Zeit und andere soziologische Abhandlungen*. Ausgewählt und mit einem Nachwort von Othhein Rammstedt. Frankfurt a. M. 2008, S. 95-102, hier S. 95.

<sup>55</sup> ジンメルの論は、シュライアマハーのそれと異なり、『老独身者』との同時代性を有するものではない。とはいえ、会食という行為における原理的な社交性を指摘した彼の考察を援用することで、本

こうした社交性の変化の末に、ヴィクトルは伯父から人生の助言を聞き受け、彼に別れを告げる。伯父の言葉はその際、自らの人生に対する後悔をにじませている。伯父がヴィクトルに結婚を勧める際、彼の若き甥が人生を知らないということを老人は強調している。そして、人生の先が長いと思いついていた者は、なすべき事の機を逸することになると言うのである。それが伯父自身の自己理解に他ならないことは、ヴィクトルに結婚を促す際の彼の言葉から容易にうかがい知ることができよう。<sup>56</sup>

このような伯父の主張を読むとき、そこには彼自身の今後の人生が、ただ死を待つのみであるかのような印象を受ける。この関連から興味深いのは、ジンメルが社交における「社会的な相互作用の上っ面」を「形式ばった無意味な生気のなさ」と呼んでいることだろう。<sup>57</sup> ジンメルにとって社交性は、歴史的には「かつてのドイツの中世」や「アンシャン・レージュム期の宮廷社会」において発展した文化である。<sup>58</sup> しかし、一度革命によって社会秩序の大転換を被ったのちのアンシャン・レージュム期には、「威圧的な現実を前にした暗い不安が、人々を素朴な見て見ぬふりや、実際の生の諸力からの絞断へと駆り立てる」ため、社交に生気のなさが漂うという。<sup>59</sup> この見方に限りなく合致しているのが、復古期オーストリアで書かれた『老独身者』における、貴族的な社会秩序の崩壊を体現するヨーゼフ主義者の成れの果てとしての伯父が放つ生気のなさなのである。

もっとも、すでに確認したように『老独身者』においては、死者であるヴィクトルの父ヒッポリートの存在がヴィクトルやルートミラの生に多大なる影響を及ぼしており、物語後半において彼は肖像を通じて、伯父とヴィクトルの前に「現前」していた。また伯父は、毛嫌いしていた社交性の象徴たる老犬スピッツを「幽霊」と呼んでいた。これらを踏まえると、『老独身者』においては、ジンメルが復古期ヨーロッパの社交に見出した「生気のなさ」が、上流階級の文化に留まらない人間関係一般に付随する要素として描かれていると言えよう。この小説では、未来における世代の「連鎖」と並んで、死した人間の過去と現在との連続性が重視されることで、生物学的に再生産される未来世代という 1800 年頃の「世代」理解に対し、一定の距離が保たれている。そうした死生観を反映した物語全体に見出される「生気のなさ」自体が、伯父とヴィクトルとの間で最終的に生じた縛りなき社交の基盤にもなっているのである。

## おわりに

以上で論じてきた通り『老独身者』という小説は、「世代 (Generation)」という言葉が浸透

---

論前節で導かれた社交という問題が、物語の細部とも関連付けられることが示されたはずである。

<sup>56</sup> 本論 13 頁以下の引用を参照。

<sup>57</sup> Vgl. Simmel, Georg: Soziologie der Geselligkeit. In: ders. (2008), S. 159-173, hier S. 172.

<sup>58</sup> Ebd., S. 169f.

<sup>59</sup> Ebd., S. 173.

しつづつあった19世紀前半のドイツ語圏における「世代」理解を反映しつつ、それに対する反発をも示した一つの文化的実践として読むことができる。遺言書と肖像を通じて為されるヴィクトルの父ヒッポリートの現前には、近代以前の伝統であった「死者の現前」という文化的事象が関連していた。その文脈からはまた、伯父がそうした伝統にそぐわないヨーゼフ主義的な人物であり、生殖を重視する近代的な「世代」理解を備えていることも分かった。他方で、彼がそうした生物学的な世代形成を実行しない老独身者であることも確かであり、ヒッポリートとルートミラの関係を考えても、彼女らヴィクトルの親世代の登場人物たちは、近代的な「世代」理解に対し二律背反の対応をとっていると言える。このように作品の中で問題となる近代的な世代間関係を脱する形で、ヴィクトルと彼の伯父が最終的に形成した「縛り」のない親族関係を、本論ではシュライアマハーが論じたような社交に近いものと解釈した。物語の最終盤で暗示されるこの人間関係のあり方は、作中の犬に関する描写を通じてその形成過程を示している。同時にその過程においては、ジンメルが復古期における社交文化を指して述べたような「生気のなさ」が、作品に独特のかたちで表現され、新たな世代観とは必ずしも一致しない親族関係を描出するために物語に組み込まれていたのである。

最後に本論の締めくくりとして、この作品の刊行された時代を生きた人間が、本論で触れたような文化的、社会的事象を認知し生活していたことを例示するために、作者であるシュティフターの伝記的事実を一瞥しておきたい。『老独身者』を執筆するまでのシュティフターの半生には、親しき人の死が繰り返されている。彼が12歳の少年だった1817年11月に、父ヨーハンが荷馬車の事故で命を落とした。その時母親は、「子供たち、あんたらのお父さんが死んだよ、もうあんたらには、面倒を見てくれる人はいないんだよ！」と言い絶望を露わにしたという。<sup>60</sup> その後シュティフターは、長年にわたる恋慕の対象であった女性ファニー・グライブルとの破局の末、彼女とも死に別れることとなる。<sup>61</sup> そうした具体的な近い人の死の体験とは別に、彼は青年期を過ごしたクレムスマンスタール修道院で、近代以前からの「死者の現前」にかかわる伝統的な文化にも触れていたはずである。風景画家として有名なシュティフターの数少ない宗教画の中には、死者の絵の典型であるキリストの磔刑を描いたものがある。<sup>62</sup> またクレムスマンスタールの設立は、バイエルンの貴族タッシオ公が自身の息子ギュンターの死を記念するためだったという伝説があるが、シュティフターはその逸話を題材とした『服喪を記

---

<sup>60</sup> Vgl. Matz (1995), S. 34.

<sup>61</sup> Ebd., 105.

<sup>62</sup> Vgl. Novotny, Fritz: *Adalbert Stifter als Maler*. Wien 1941, S. 81f. 絵画の執筆年は1835年と刻印がある。死者の絵 (Totenbild) の画像学的理解に関しては、Vgl. Brückner, W.: Art. „Totenbild“. In: *Lexikon der christlichen Ikonographie*. Hrsg. von Engelbert Kirschbaum SJ in Zusammenarbeit mit Günter Bandmann, Wolfgang Braunsfels, Johannes Kollwitz, Wilhelm Mrazek, Alfred A. Schmid, Hugo Schnell. Vierter Band. Rom / Freiburg / Basel / Wien 1972, Sp. 340-343.

念する祝賀会 (*Das Freundschaft am Trauerdenkmahle*)』という 32 詩節 171 行の詩を、まだ作家になる以前の 1824 年に僧院のギムナジウムで披露し、賞を与えられている (SW 25, 12ff.)。そうした創作に関わる事象のみならず、実生活においても彼は死にかかわる法的書類としての遺言書を作成していた。<sup>63</sup>

はじめに述べている通り、本論はこうした作者の伝記的事実から作品を解釈することを意図していない。シュティフターという一個人が経験した死別、死者に関する伝統、現実の死を考慮した法的処置は、彼以外の人間でも体験しうる社会的な事柄であり、だからこそ『老独身者』という作品は、「それを読む誰しも」が共感を得るような物語として解釈することが可能であるように思われる。

---

<sup>63</sup> ちょうど『老独身者』の雑誌版が刊行される 1845 年に、シュティフターは妻であるアマーリエを遺産相続人に指定した遺言書をはじめ作成している。そして 1858 年にも、同じ内容の文書を残している (SW 25, 344f.)。

## Die Gegenwart der Toten und die Geselligkeit

— Stifters *Hagestolz* und die kulturelle Praktik der Generationsbildung —

SUGIYAMA Toyo

Eine der ältesten Rezensionen von Stifters Novelle *Der Hagestolz* (Journalfassung: 1845; Buchfassung: 1850) vertritt die Ansicht, dass „jeder, der sie liest“ mit dem Inhalt sympathisieren müsse. Die bisherige Forschung hatte jedoch die Tendenz, diese Novelle nur hinsichtlich ihrer Bezüge zur Biographie des Autors zu diskutieren wie beispielsweise seiner kinderlosen Ehe. Um dieses eingeschränkte Blickfeld zu erweitern, befasst sich die vorliegende Abhandlung mit den sozialgeschichtlichen Hintergründen der Erzählung und damit, welche Bedeutung diese für ihre Interpretation haben.

Für ein Verständnis des historischen Kontexts der Novelle ist es notwendig, die vielfältigen Veränderungsprozesse nachzuzeichnen, die der Begriff der „Generation“ um 1800 durchlief. Damals begann man, das Wort „Generation“ nicht mehr nur in diachroner, sondern auch in synchroner Bedeutung zu verwenden. Gleichzeitig entwickelte die Naturwissenschaft biologische Generationsmodelle. Im modernen Recht führte das zu einer allgemeinen Anerkennung der Blutsverwandtschaft im Erbrecht bürgerlicher Familien. Daneben verloren die Verstorbenen zunehmend ihren Status als Rechtssubjekt, so dass sie nur noch als Leichen im naturwissenschaftlichen Sinn behandelt wurden. Diese rechtliche Abwertung der Toten ist ein kulturelles Phänomen, das in scharfem Gegensatz zur andauernden Gegenwart der Toten in der mittelalterlichen Kultur und danach steht. Das hatte auch Auswirkungen auf das Testament, dessen Bedeutung ebenfalls durch das biologische wie juristische Verständnis der „Generation“ beeinflusst wurde. Dieses Rechtsinstrument versicherte nun die Grenze zwischen Toten und Lebenden, indem es die Verbindung des diesseitigen Lebens mit dem letzten Willen der schon im Jenseits weilenden Toten neu regelte. Die beschriebene Auffassung von „Generation“ um 1800 ist bei einer Interpretation der Konstruktion von Generationen in *Der Hagestolz* zu berücksichtigen.

Das Motiv des Testaments spielt in Stifters Erzählung eine wichtige Rolle. Die Stiefmutter Ludmilla sorgt für den Protagonisten Viktor, weil dessen toter Vater Hippolith dies so in seinem

Testament gewünscht hatte. Die daraus entstehende Beziehung zwischen Mutter und Sohn wird aber von Viktor und Ludmilla selbst keineswegs mit einer blutsverwandtschaftlichen gleichgesetzt. Hier spiegelt sich das moderne Verständnis der „Generation“ wider. Die konkreten Hintergründe der älteren Generation, zu der Ludmilla, Hippolith und der namenlose Oheim Viktors gehören, kommen in der erzählten Vergangenheit des Oheims und der Schilderung seines Lebensraums zum Vorschein. Der alte Junggeselle, ein früherer Zögling der Akademie, lebt jetzt in einem aufgegebenen Kloster. Die Darstellung seines Lebens ist deshalb vielleicht vom Josephinismus beeinflusst, der dem Geistlichen, also z. B. den Lehren des Klosters, ablehnend gegenüberstand. Das vom Oheim gezeichnete Bild des jungen Hippolith in der Vergangenheit ist ein weiteres Indiz hierfür, dient aber zugleich als Anlass für Viktors Partnerwahl in dieser Novelle. Nachdem letzterer das Porträt der jungen Ludmilla sah, deren Gestalt der seiner Stiefschwester Hanna sehr ähnelt, entschließt sich Viktor nach seiner Heimkehr zur Ehe mit Hanna. In dieser Erzählung ist also sowohl das moderne biologische Verständnis von Verwandtschaft bedeutsam als auch die vormoderne oder nicht auf Biologisches beschränkte Beziehung zwischen mehreren Generationen. In diesem Sinn erweist sich der Begriff der „Generation“ in *Der Hagestolz* als ambivalent.

Aus dieser Perspektive betrachtet, ist auch Stifters Verwendung der Wörter „Band“ und „Kette“ interessant. Gegenüber der traditionellen diachronen „Kette der Geschlechter“ kommt in *Der Hagestolz* den „Banden“ der Familie eine wichtige synchrone Bedeutung zu. Darüber hinaus werden auch die nicht durch verwandtschaftliche Bande konstituierten „Verhältnisse“ zwischen Viktor und dem Oheim erwähnt. Ihre Beziehung könnte man vor dem historischen Hintergrund des zeitgenössischen Begriffs der „Geselligkeit“ sehen, mit dem sich um 1800 zuerst F. D. E. Schleiermacher theoretisch beschäftigte. Eine Analyse der Motive des Hundes, der Mahlzeit und der tödlichen Atmosphäre in der Erzählung erweist zudem die besondere Funktion einer eigentümlichen Geselligkeit und ihrer Entfaltung zwischen den Figuren.

Zusammenfassend lässt sich sagen, dass die in Stifters *Der Hagestolz* dargestellten Beziehungen als kulturelle Praktik ein ambivalentes Verhältnis zu dem Verständnis von „Generation“ um 1800 aufweisen. Allerdings ist dies nicht allein aus der Biographie des Autors herzuleiten. Zwar machte Stifter durchaus persönliche Erfahrungen mit dem Tod von Verwandten, der Kultur der Gegenwart der Toten oder mit Testamenten, doch waren dies auch soziale Tatsachen in der Erfahrungswelt seines Publikums, das daher mit dem Inhalt der Novelle sympathisieren konnte.